九月十五夜（菅原道真）

黄萎の　顔色　白霜の　頭
況んや　復　千余　里外に　投ぜ　らるるをや
昔は　栄華　簪組に　縛せられ
今は　貶謫　草莱の　囚と　為る
月光は　鏡に　似たるも　罪を　明かに　する無く
風気は　刀の　如く　なるも　愁を　断たず
見るに　随い　聞くに　随うて　皆　惨慄
此の　秋は　独り　我が身の　秋と　作る

黄萎顔色白霜頭　況復千餘里外投
昔被栄華簪組縛　今爲貶謫草莱囚
月光似鏡無明罪　風氣如刀不斷愁
隨見隨聞皆慘慄　此秋濁作我身秋

解説　九月十五日の夜、月を眺めながら、秋風を感じ、身のさびしさ、悲しさを詠じたもの。

語釈　※黄萎＝樹木の葉が秋に至って黄色に変じ、萎えしぼむこと。※白霜＝白髪で頭が覆われているさま。※況復＝まして、その上にも。※千余里外投＝千里も遠い彼方に貶謫される。※栄華＝栄耀栄華の略。富貴福禄の盛んなこと。※簪組＝高官のこと。※縛＝自由を拘束されている状態。※風気＝風の吹くさま。※慘慄＝すさまじい、またいたましいさま。

通釈　思いも寄らない冤罪により、遠い地に流される身となった。今はいささか気持ちの平静を取り戻したものの、年老いて、顔の艶はなくなり、その色も晩秋に黄ばみ凋む草木のようになり、頭髪もまるで白霜と化してしまった。身は都から千里以上もある地に流されて、惨憺たるありさまで、気力もまた萎えてしまった。かつては高貴の地位にあり、その官職のために、個人的な時間などまったく持つことも出来なかったが、今は理由もなしに、この草深い辺鄙な地に身を置かれ、あり余る時間の中に、思うことは募っていくばかりである。月は皓々と鏡のように照り輝いているものの、私の無罪をその鏡のように晴らしてくれる訳でもなく、自然の風気は刀のように薙ぎ払うかのようであるが、その風気も私の愁いを断ち切ってはくれない。すべてが痛ましく哀しく、今年の秋は寂寥を一身に集めたような感じがする。